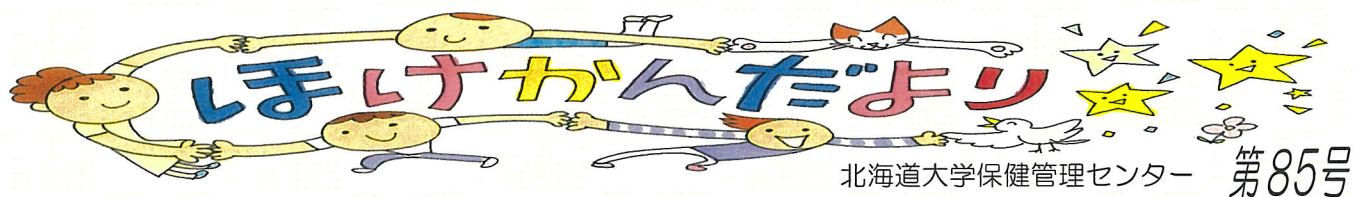




Title	海鳴り
Author(s)	逸見, 勝亮
Citation	ほけかんだより, 85, 1-1
Issue Date	2008-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39253
Type	article
File Information	hemmi_hokekan85.pdf





海 鳴 り

理事・副学長 逸見 勝 亮

◇1954年11月21日、僕は室蘭市御前水町鷺沢から幌別郡幌別町字鷺別（現登別市鷺別町）へ引っ越した。母はすぐ下の弟を母の実家の養嗣子とし、僕と末弟を連れて鷺別で小売業を営む逸見寛一と再婚したからである。僕の姓は三谷から逸見となり、生活は激変した。養父方の親類と顔を合わせた宴席では、誰もがこわばった表情であった。翌朝新しい父に「父さん」と呼びかけるには相当骨が折れた。商品の値段は父に訊くしかなかった。1955年3月までは室蘭市立天沢小学校へバスあるいは鉄道で通ったが、4月には幌別町立鷺別小学校へ転校した。

◇下駄屋・魚屋・米穀店兼酒屋・本屋・食料品店・自転車屋・豆腐屋・薬局・炭屋・鍛冶屋・呉服屋・床屋・畳屋・郵便局などが並び60メートルほどの通りの一郭に逸見商店はあった。海岸からは数百メートルに位置していた。引っ越してまもなく、遠くから耳の奥を揺さぶるような凄まじい音がして夜中に目を覚ました。家は鷺別川から100メートルも離れていなかったから、洪水ならひとたまりもないが、家族は騒ぎ立てる様子もないので洪水ではない。風の音でもない。初めて聴く海鳴りであった。

◇店舗は、間口奥行き共に2間で、文房具・玩具・駄菓子・縫い針・糸・ボタン・ベルト芯・釣り道具・日除け・軍手・軍足などを扱っていた。学校へ行っているとき以外は、店番と配達が生活の大部分を占めた。それまでは、配給米・麦飯を喰い、縁側・風呂・庭のある社宅に暮らしていたのが、米は闇米（白米）となり、新鮮な魚を食べる機会は増え、4畳半一部屋に家族4人が住み、電話があり、台所と便所は隣室の5人家族と共同で使用する暮らしとなった。風呂は銭湯である。衣は変わらず、食は「贅沢」となり、住は「普通」かそれ以下になった。

◇一番列車で働きに出る失業対策事業の日雇いや下請け労働者をあてに、朝は6時に開店した。軍手や日除け・麦わら帽子がよく売れた。夜は11時頃まで開けていた。縫い針といっても用途によって、毛糸針・布団針・溝大くけ・大くけ・木綿縫い・木綿襟締め・絹襟締め・絹縫い・小ちゃぼ・四ノ一・皮針・メリケン針・待針と太さ・長さ・針穴の大きさは多様であった。記憶では種類と品名が混在している。ミシン針も数種類扱った。

◇1954年の秋の夜更けに、母は眠っていた僕を起こして「上の学校に行かせてくれると言ってきているから」と再婚話をした。僕は「うん」とだけ答え

た。一緒に暮らしていた祖父は定年退職となり、日本製鋼所室蘭製作所購買組合売店に勤めていた母の収入で、母子4人が暮らすのは無理とは僕にもわかっていて。宴席では気がつかなかったが、翌朝父の左手は手首から、右手は動かすことのできない人差し指と中指しかないことを知った。食事は指に固定するよう工夫したスプーンを、書き物は指の間に挟んだボールペンを用いた。一度は現役兵として従軍し、二度目の徴兵で砲弾破片創を負った戦傷者であった。僕はたじろぎ戸惑ったが、母も父もお互いに助け合う必要があったと考えることはできた。骨が透けて見えたので、左には毛糸で編んだ被いと袋状の腕抜きをはめ、右には包帯を巻いていた。口にははしなかったが、幻肢痛もあったであろう。

◇父は男5人女1人兄弟妹の3男である。長兄を除く4人が徴兵され、父は戦傷を負い末弟は戦死した。新しい祖母は、毎日仏壇に祈りながら、遺族年金をもたらず戦死した息子が「一番親孝行」と穏やかに、しかしきりりと話した。実父三谷幸雄、その兄、母の弟と妹の夫は徴兵され、母の弟は戦死した。僕の両親の身近では8人が徴兵され、2人が戦死し、1人は戦傷者であった。僕たちは多くの家族と同様に戦争を引きずって暮らしていた。新参者に対する近隣の眼差しは柔和であったが、ある日近所の悪童達が父を「てぼっこ」と囃し立てた。父は黙したままであった。僕は戸締まり用の棒を振り上げてSを襲ったが、彼を打ち据えるに僕の脚は遅過ぎた。

◇正月飾りを売るとお年玉を手にした子ども相手でも、年末年始の2週間余は特に多忙であった。大晦日の就寝は真夜中の2時、1月2日は午前6時には開店。さすがに元日だけは店を閉めて正月料理を食するが、前後2週間は3食とももっぱら湯漬けと塩鮭である。1955年1月8日の朝に、父から「これを」とのし袋を渡された。10枚の千円札が入っていた。僕は商品ケースに並べていた万年筆を仕入値で買った。学校と店番の生活にも次第に慣れて熟睡するようになったのだろう、その後海鳴りを聴いたことはない。



◇1954年11月21日、僕は室蘭市御前水町鷺沢から、母はすぐ下の弟を母の実家の養嗣子とし、僕と末弟を連れて鷺別で小売業を営む逸見寛一と再婚したからである。僕の姓は三谷から逸見となり、生活は激変した。養父方の親類と顔を合わせた宴席では、誰もがこわばった表情であった。翌朝新しい父に「父さん」と呼びかけるには相当骨が折れた。商品の値段は父に訊くしかなかった。1955年3月までは室蘭市立天沢小学校へバスあるいは鉄道で通ったが、4月には幌別町立鷺別小学校へ転校した。

◇1954年の秋の夜更けに、母は眠っていた僕を起こして「上の学校に行かせてくれると言ってきているから」と再婚話をした。僕は「うん」とだけ答え

た。一緒に暮らしていた祖父は定年退職となり、日本製鋼所室蘭製作所購買組合売店に勤めていた母の収入で、母子4人が暮らすのは無理とは僕にもわかっていて。宴席では気がつか

なかったが、翌朝父の左手は手首から、右手は動かすことのできない人差し指と中指しかないことを知った。食事は指に固定するよう工夫したスプーンを、書き物は指の間に挟んだボールペンを用いた。一度は現役兵として従軍し、二度目の徴兵で砲弾破片創を負った戦傷者であった。僕はたじろぎ戸惑ったが、母も父もお互いに助け合う必要があったと考えることはできた。骨が透けて見えたので、左には毛糸で編んだ被いと袋状の腕抜きをはめ、右には包帯を巻いていた。口にははしなかったが、幻肢痛もあったであろう。

◇父は男5人女1人兄弟妹の3男である。長兄を除く4人が徴兵され、父は戦傷を負い末弟は戦死した。新しい祖母は、毎日仏壇に祈りながら、遺族年金をもたらず戦死した息子が「一番親孝行」と穏やかに、しかしきりりと話した。実父三谷幸雄、その兄、母の弟と妹の夫は徴兵され、母の弟は戦死した。僕の両親の身近では8人が徴兵され、2人が戦死し、1人は戦傷者であった。僕たちは多くの家族と同様に戦争を引きずって暮らしていた。新参者に対する近隣の眼差しは柔和であったが、ある日近所の悪童達が父を「てぼっこ」と囃し立てた。父は黙したままであった。僕は戸締まり用の棒を振り上げてSを襲ったが、彼を打ち据えるに僕の脚は遅過ぎた。

◇正月飾りを売るとお年玉を手にした子ども相手でも、年末年始の2週間余は特に多忙であった。大晦日の就寝は真夜中の2時、1月2日は午前6時には開店。さすがに元日だけは店を閉めて正月料理を食するが、前後2週間は3食とももっぱら湯漬けと塩鮭である。1955年1月8日の朝に、父から「これを」とのし袋を渡された。10枚の千円札が入っていた。僕は商品ケースに並べていた万年筆を仕入値で買った。学校と店番の生活にも次第に慣れて熟睡するようになったのだろう、その後海鳴りを聴いたことはない。

53年前に購入し、今も使っている万年筆。